

創造的復興研究会

2023/09/14

環境・まちづくり先進地域にみられる 共創的プロセスの記述と 復興まちづくりへの展開

国立環境研究所

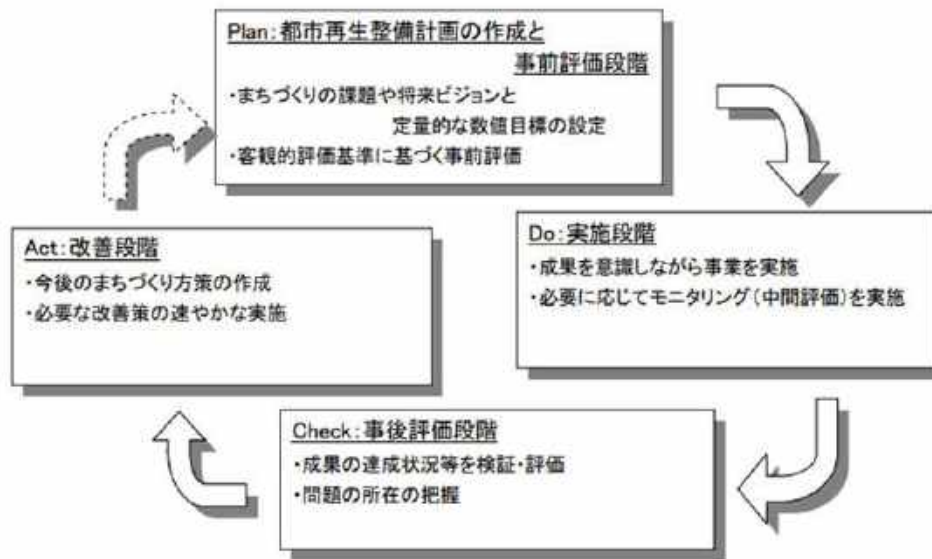
福島地域協働研究拠点

戸川卓哉

1. 背景と目的
2. 先進事例調査
 - 2.1 岩手県紫波町
 - 2.2 宮城県女川町
 - 3.3 宮崎県日南市
3. 抽出されたパターンの紹介と考察
4. パターンの展開に向けたワークショップ
5. まとめ

はじめに -背景と目的-

- 都市計画、まちづくりの標準的アプローチ：
 - PDCAサイクル（Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Act（改善））の4段階を繰り返して業務を継続的に改善する方法）



出典) 国土交通省、
都市再生整備計画事業評価の手引き,2017

- 現実社会の複雑さを考慮した計画を作成することが困難

はじめに -背景と目的-

発展的プロセスに注目した方法論

タクティカルアーバニズム：

- 長期的に都市に変化をもたらすための、短期的、低コスト、規模拡張が可能な介入を用いた、行政、民間組織そして市民による地域づくりのアプローチ
- アクションから都市に変化を促すこと
- オープンストリート、カーフリーデー

プレイスメイキング：

- 1)コミュニティと顔合わせ、ステークホルダーの把握、2)現況空間の評価、課題の把握、3)プレイスとしてのビジョンづくり、4)短期間の実験、5)継続的な再評価と長期スパンの改善
- ビジョンはハードのデザインではなく、利用方法と活動の種類に応じてどのように空間を使い分けるかというレイアウトに関するもの
- デトロイトの再生（車から人中心のまちへ）

環境・まちづくり先進都市の事例

環境モデル都市（23都市、2008-）

低炭素社会の実現に向けて温室効果ガスの大幅削減などへの取り組みを行うモデル都市として、日本政府により選定された自治体

環境未来都市（11都市、2011-）

環境や高齢化対応などの課題に対応しつつ、持続可能な経済社会システムを持った都市・地域づくりを目指すモデル都市として、日本政府により選定された自治体

SDGs未来都市（2018-）

地域のステークホルダーと連携し、SDGs達成に向けて戦略的に取り組んでいる地域・都市として、日本政府により選定された自治体



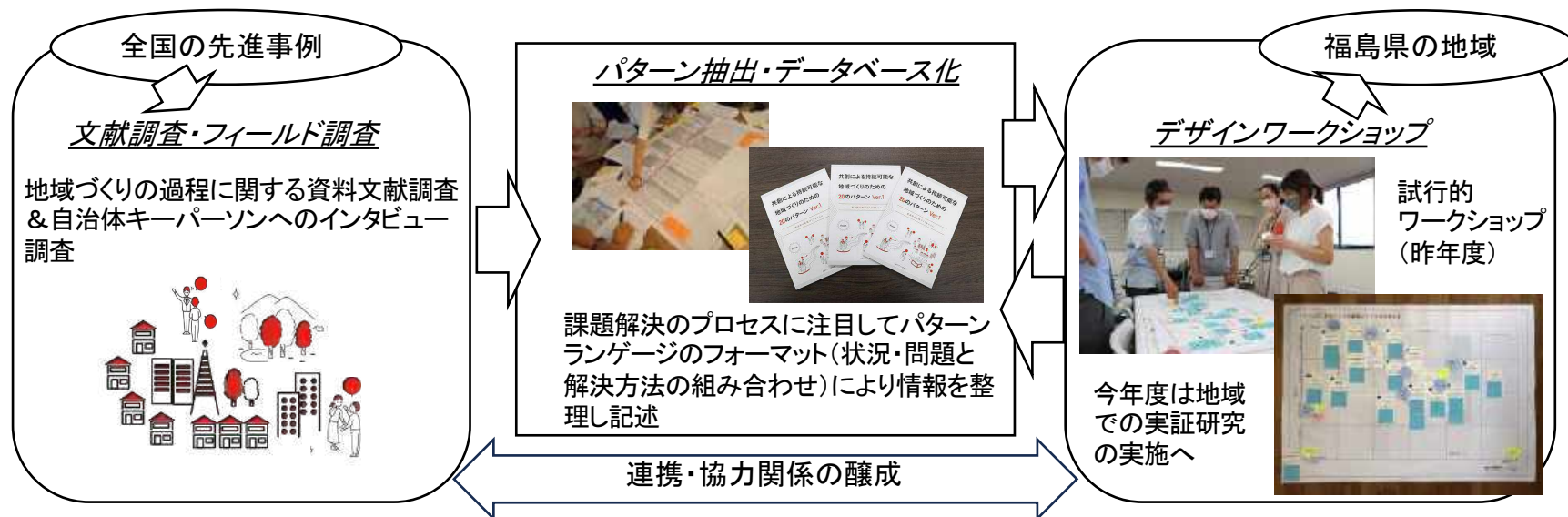
出典）内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局

脱炭素先行地域（少なくとも 100 か所指定、2021-）

地域特性に応じた効果的・効率的な手法を活用し、2030 年度までに民生部門の電力消費に伴う CO₂ 排出については実質ゼロを実現
先行地域を生み出すことで、脱炭素の取り組みを全国に伝搬させ、2050年より早くカーボンニュートラルを実現する

環境まちづくり先進事例調査とその知見の展開

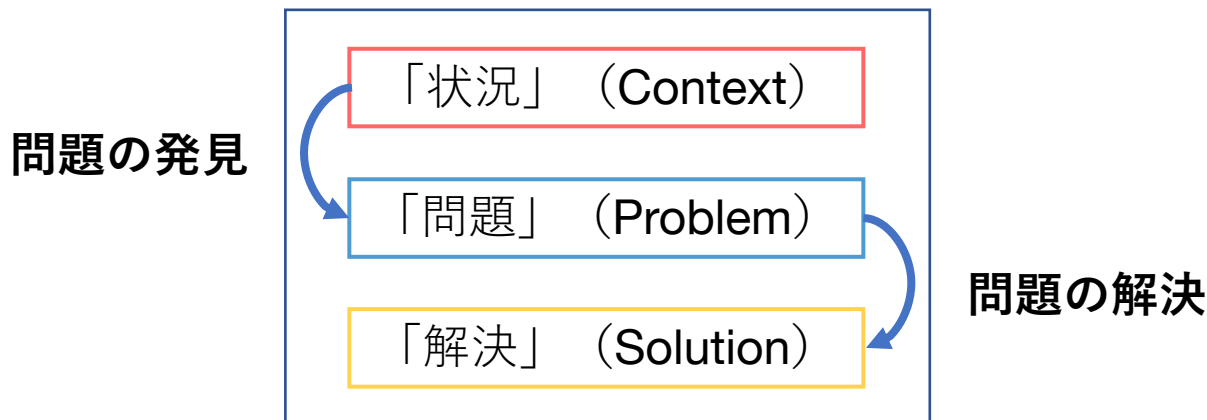
- 全国の環境的視点を考慮したまちづくり先進事例を調査し、それらの知見を福島県の地域づくりに展開するためのフレームワークを構築



- 「パターン」とは、繰り返し発生する課題に対して実践されてきた課題解決のアイデアを文書化したもの。
- 各「パターン」は、それが適用できる「状況」、明確化された「課題」、その背後に働いている力であり解決方法を導出するためのヒントとなる情報「フォース」、そして「解決方法」とそれが実行された後に実現する「結果状況」という一連のフォーマットに基づいて記述される。

パターン・ランゲージとは？

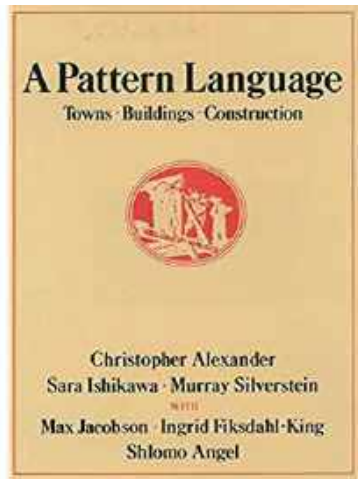
- 対象領域における「経験則」（成功に潜む共通パターン）を「言語化」したもの
- パターンは「デザインの知」（問題発見＋問題解決の知）が記述されている
 - どのような状況（Context）のとき
 - どのような問題（Problem）が生じやすく
 - それをどのように解決（Solution）すればよいか



⇒「認識」「思考」「コミュニケーション」を支援

パターン・ランゲージとは？

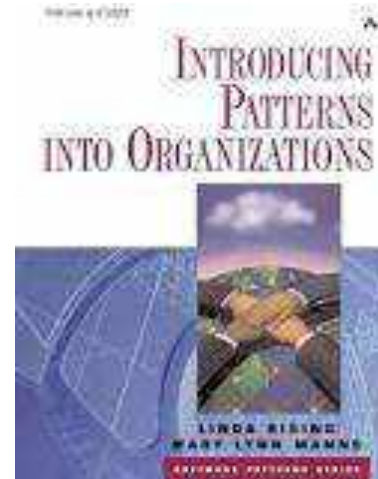
○発展の系譜



1977



1994



2004



2014

○国内の研究論文レビュー

CiNiiで「パターンランゲージ」「パターン・ランゲージ」をキーワードとしてヒットした文献のうち2008年以降に出版されたものを対象

	デザイナーと使う人との 断絶を橋渡しする	デザインの熟達者と非熟 達者の差を埋める	それぞれ異なる経験を持 つ多様な人々を繋ぐ
物理的な もの（建築 等）	まちづくり[13,23]	防災まちづくり[42]	
非物理的 なもの （情報シ ステム等）	ユーザ参加型ソフトウェ ア[3]	音声インターフェース [12]、情報システム [19,54]、ロボットコンテ スト[27]、授業（国語） [31,32,43,52,56,65]	
人間関係	こどもの外遊び[40]	プロジェクトマネジメント [7,10]、保育者の実践 知[66]、e学習[41]、展覧 会開催プロセス[62]	研究活動[6]、伝え方（リ スコミ）[29]、学習[33]、 プレゼン[33]、コラボレ ーション[33]

パターン・ランゲージとは？

Alexander(1977)

例) **街路を見下ろすテラス**

状況：屋内の人間と屋外の街路世界との触れ合いを保つ場所が必要

問題：プライバシーと街路交流とのバランスを保つことが困難

解決：居間と街路とのあいだに広いテラスを設ける。テラスは街路よ...

パターン・ランゲージとは？

Mary Lynn Manns, Linda Rising(2004)

例) **アーリーアダプター**

状況：新しいアイデアの導入を支援してくれるイノベーターが数人いる

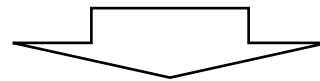
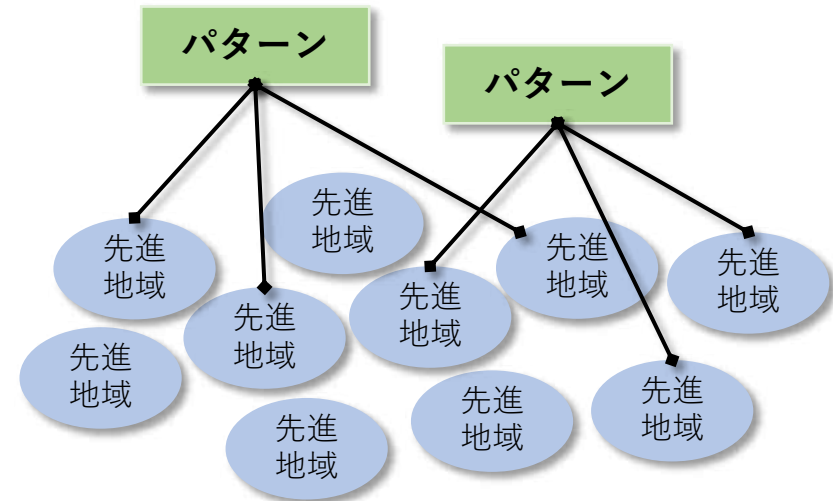
問題：組織内にインパクトをもたらすため、より多くの人々の関心を集める必要

解決：組織内のオピニオンリーダーを探し、彼らの助けを求めよう

パターン・ランゲージとは？

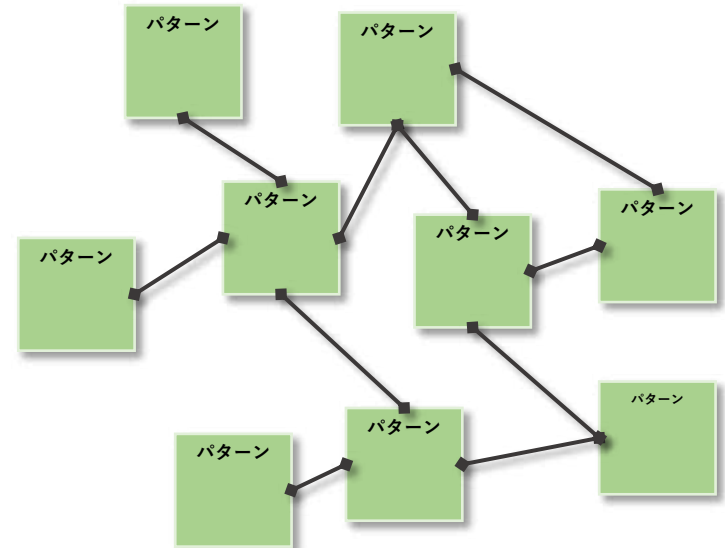
パターンの抽出・記述

- 先進地域を複数調査し、それらに特徴的に現れるパターンを抽出
- パターンランゲージの枠組みに基づきパターンの関係を整理



パターンの活用

- 抽出されたパターンを地域性に応じて組み上げ、持続可能な社会への転換プロセスについてのヴィジョンを検討



1. 背景と目的
2. 先進事例調査
 - 2.1 岩手県紫波町
 - 2.2 宮城県女川町
 - 3.3 宮崎県日南市
3. 抽出されたパターンの紹介と考察
4. パターンの展開に向けたワークショップ
5. まとめ

これまでの調査対象地域

復興
まちづくり



公民連携の
まちづくり
脱炭素
先行地域



環境再生



商店街再生
地域活性化

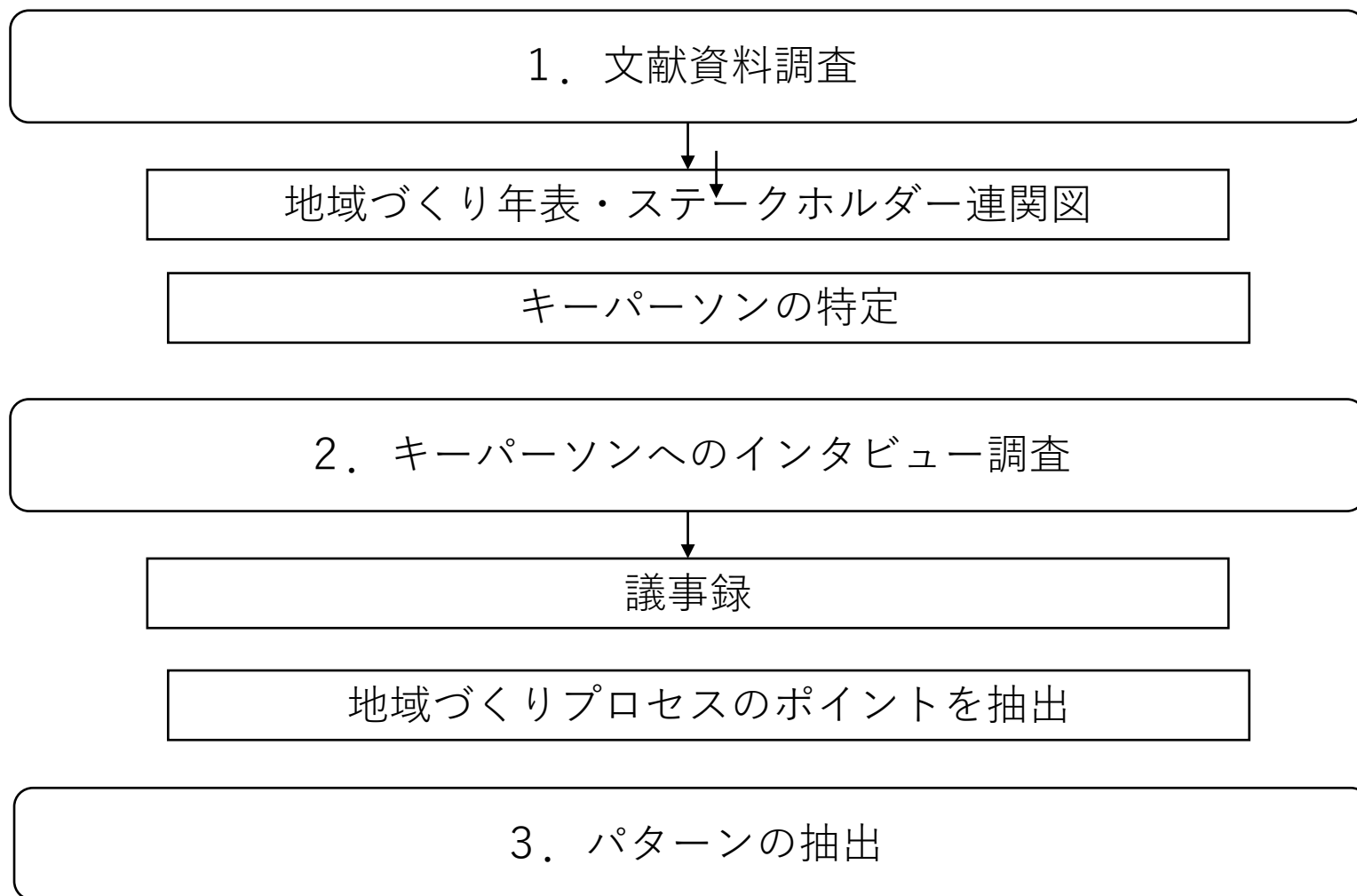


地域環境資源の活用
脱炭素先行地域

対象地域の概要

	岩手県 紫波町	宮城県 女川町	宮崎県 日南市
人口	33,090人 (2020/3/31)	6,319人 (2020/4/30)	51,240人 (2019/6/1)
地域課題	駅前空き地	災害復興	中心市街地 活性化
対象 プロジェクト	オガール プロジェクト	復興まちづくり	油津商店街の再生
対象期間	1998年-2018年	2010年-2019年	2009年-2017年

調査方法



1. 背景と目的
2. 先進事例調査
 - 2.1 岩手県紫波町
 - 2.2 宮城県女川町
 - 3.3 宮崎県日南市
3. 抽出されたパターンの紹介と考察
4. パターンの展開に向けたワークショップ
5. まとめ

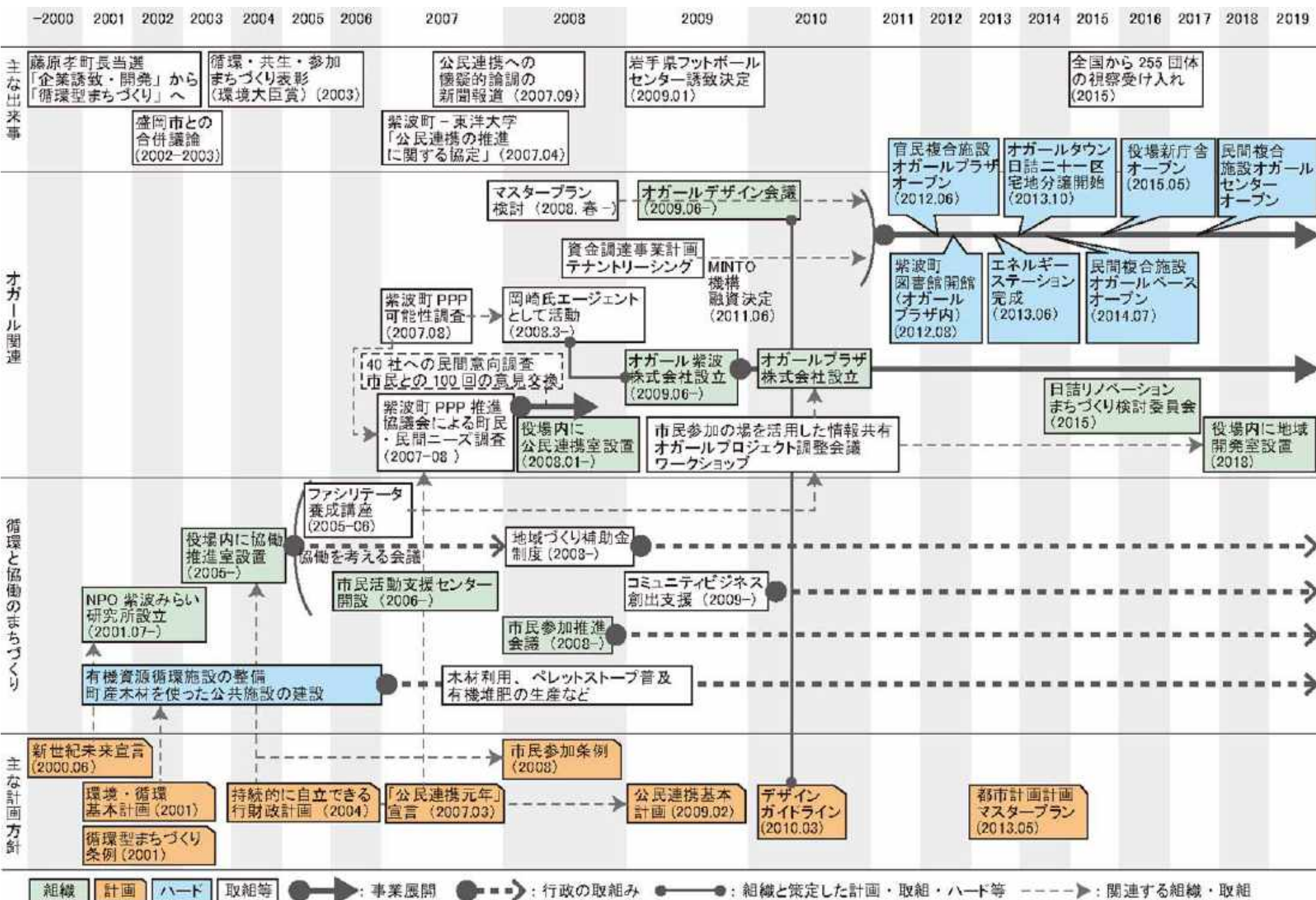
岩手県紫波町の概要



- 面積 238.98km²
- 人口 31,969人
(推計人口、2019年10月1日)
- 主産業は農業、林業、盛岡市のベッドタウンとして発展
- 町有地を開発するオガールプロジェクト
- 自治体職員・議員による視察の受け入れ件数：全国1位 (2016～2018)

オガール紫波プロジェクト





公民連携室の活動（町民との対話）

広報誌「公民連携
ニュース」発行

住民説明会
(2008)

海外事例調査
(2009)

元 JETRO
(日本貿易振興機構)
リサーチャー

オガール広場活用
ワークショップ
(2009)

市民コミュニティ

公民連携室

NPO カントリーラボ

鎌田千市氏
紫波町役場 公民連携室

公民連携基本計画
(2009)

ファイナンシャル計画

紫波町 PPP
可能性調査
(2007)

山口正洋氏
(銀行投資家)

不動産証券化
手法の検討

東北銀行との交渉

MINTO 機構
との交渉 (2009-11)

東洋大学

紫波町役場

藤原崇氏
(町長)
1998-2014

経営品質会議

岡崎正信氏
株式会社オガール紫波
代表取締役

清水義次氏
(都市再生
プロデューサー)

農林課

紫波町農林公社

農協

図書館を考える会
2001～

図書館整備検討委員会
2006～

秋田県立図書館
企画協力班

ライフスタイルの
デザイン

紫波マルシェ

図書館

オガール企画
合同会社

コンテンツ計画

岩手県フットボール
センター誘致
(2008-9)

バレーボール
専用体育館

情報発信

TMO
よんりん舎

SPC
オガール
プラザ
株式会社

マスタープラン
づくり (2008)

北欧視察
(2009)

紫波町循環型
まちづくり条例 (2001)

日誌リノベーション
まちづくり検討委員会
(2015)

紫波町オガール・
デザイン会議
(2010)

エコタウン

竹内昌義氏
(建築家)

松永安光氏
(建築家)

デザインガイドライン
(2010)

長谷川浩己氏
(ランドスケープ
アーキテクト)

佐藤直樹氏
(グラフィック
デザイナー)

空間・環境・デザイン

専門家

取組等

組織

計画

インタビュー調査内容

- 具体の各課題※の解決プロセスについて
- 各課題※の解決プロセスの相互の関係性について
- 町民／町役場の意識と実態がどのように変化したか？
- その他・基礎的な情報について

※循環型まちづくり、市民参加、コミュニティビジネス、図書館計画、オガールプロジェクト等

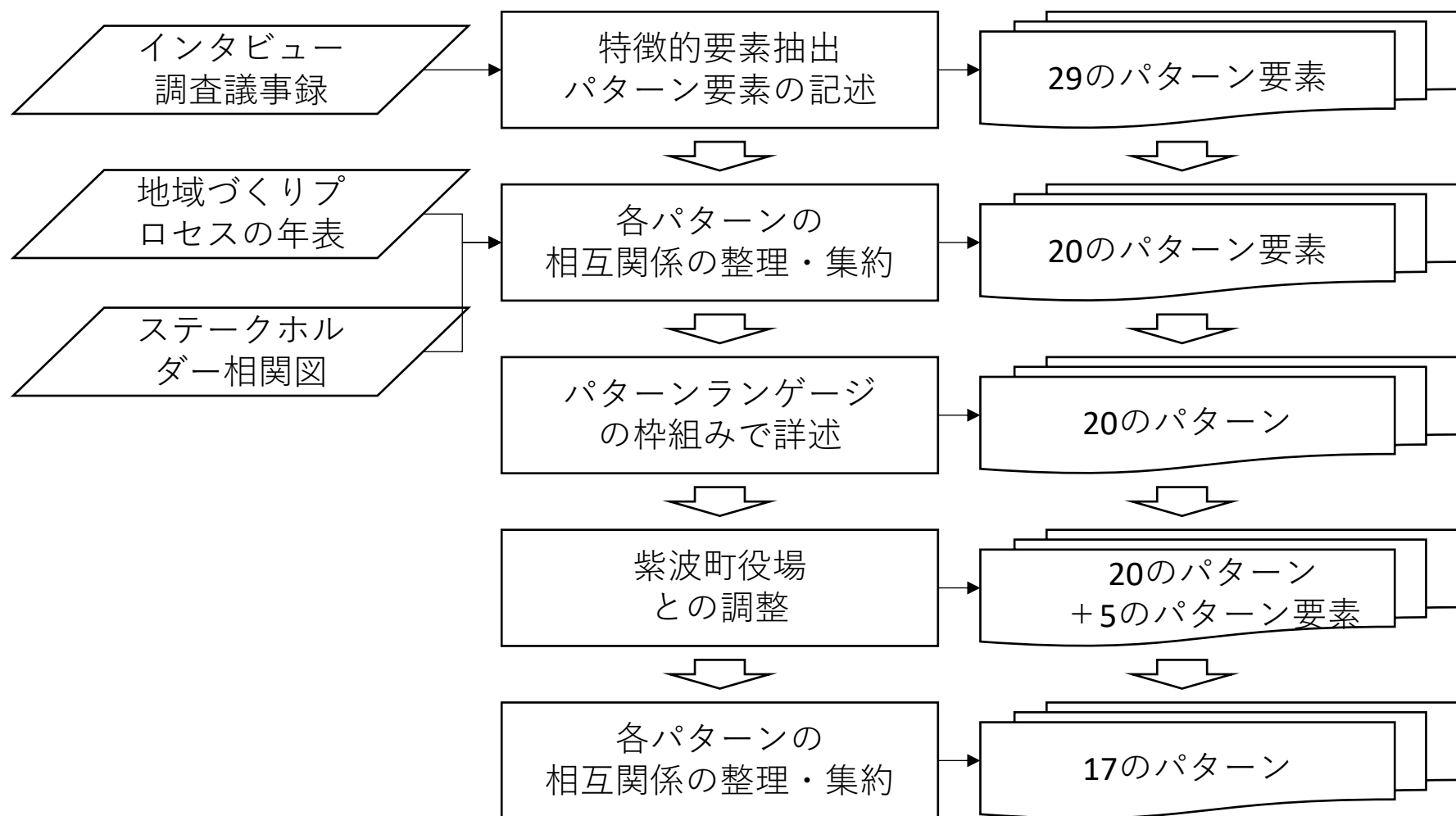
岩手県紫波町でのインタビュー調査 1

- 紫波町役場企画総務部・鎌田千市氏、2019年8月29日午後@町役場
- 全体的なプロセスとして、新世紀未来宣言（2000）において提示された「紫波町の環境を100年後に残していく」という大きな方針の中で、9地区（合併前の1町8村）の協働まちづくりを経て、行政課題である中心地区にどう投資していくかという流れで地域づくりを進められたことが効果的であった。
- オガールプロジェクトの起点となった公民基本連携計画（2009）では、オガール地区と旧来よりの中心市街地である日詰商店街を一帯的に開発区域として括り、それらを両輪として回すこととした。これにより、町全体から見た中心地区をどうするかという議論を展開できた。そのために町内9地区を四巡し、目的コミュニティとの懇談を重ねるなど、全町的に意見を聞いてきた。
- 公民連携という新しい手法に対しては、当初、懐疑的な意見も多く、揺り戻しが起きることも懸念された。それを未然に防ぐためには、住民の合意形成を得ることや議会説明を高頻度で行うことでポリティカルリスクを防ぐことが特に重要であった。
- ⇒個別の政策や事業ではなく地域づくりの発展的プロセスをコンテキストのレベルで考えていくことの重要性

岩手県紫波町でのインタビュー調査 2

- 「持続的に自立できる行財政計画」（2004）の立案は意義深かった。財政が逼迫する中で、不動産活用と施設整備を進めるという課題が明確になり、民間との連携が必然となった。
- 企画部門に特化した組織（公民連携室）を作り、それが中心になって全庁を調整していくことで、民間のスピード感に併せる内部調整を実現した。
- エージェントの役割や組織体制は状況に応じて柔軟に変化していったが、行政が不得意とする分野である民間活力誘導業務を委ねることができたことは効果的であった。
- 日詰りノベーションまちづくり（2015-）がオガールの経験に基づいてが進められている。イノベーションスクールなどステークホルダーが集まる場をつくることを行政の役割とし、意欲のある人に補助金ではなく資源活用を支援する体制を作っている。
- ⇒ 地域状況の正確な認識に基づき、地域コミュニティや地域内外のステークホルダーとのコミュニケーションを図りつつ、それぞれが自立して地域づくりに参画するよう促すことを通じて、多様な取り組みをヴィジョンに則する方向に誘導しているという実態が明らかになった。

パターン抽出のプロセス



パターンの記述例（紫波町編）

パターン名

パターンの内容を簡潔に表現した名称

概要・イラスト

パターン全体の概要を表現するイラストと文章

狀況

パターンの適用が望まれる典型的な状況や課題

問題

状況に応じて現れる明確化された課題



フォース

状況・問題の背景で働いている
様々な力（フォース）

解決方法

問題を乗り越えるための解決方法

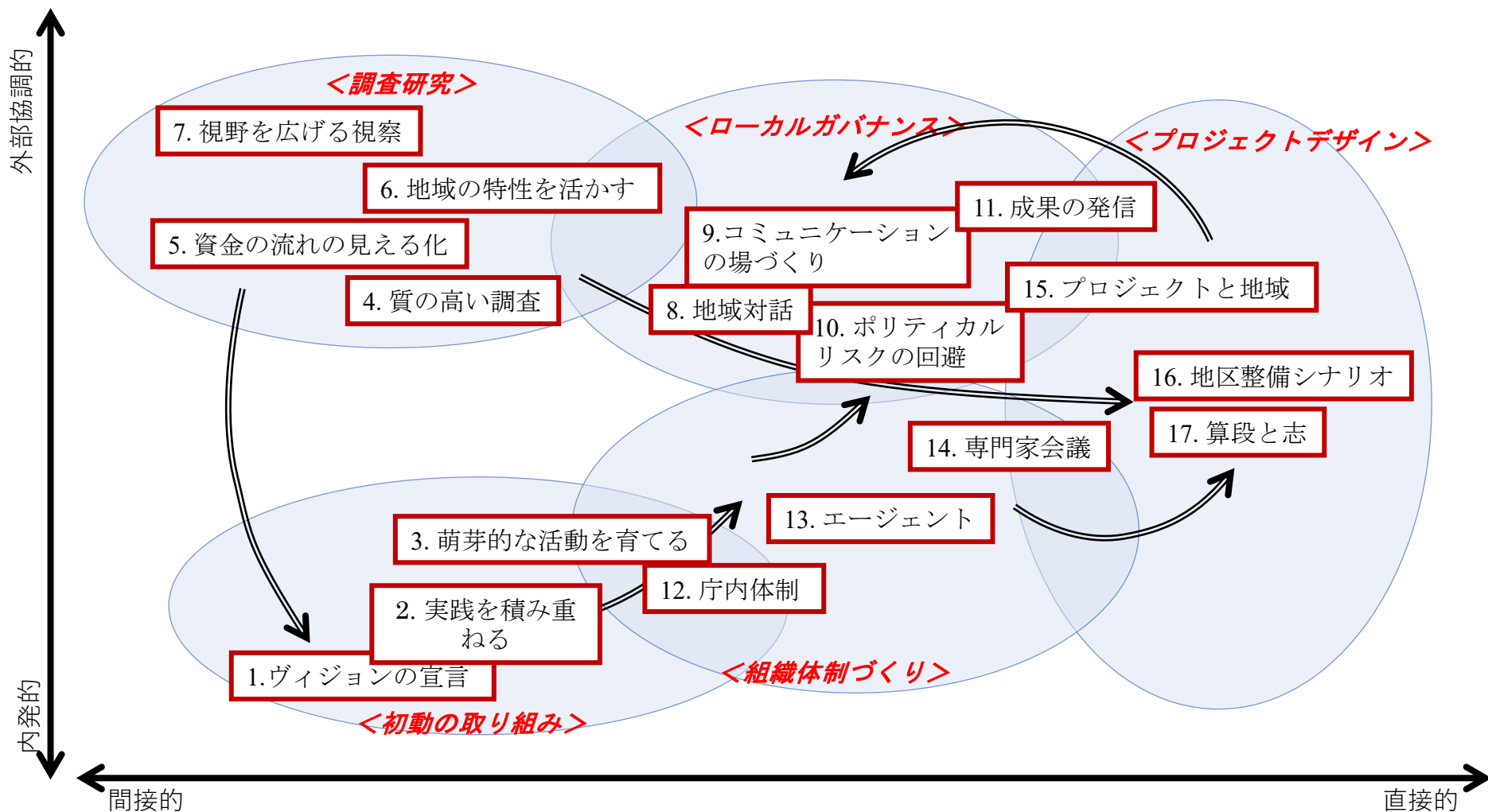
結果状況

解決方法が実践された結果、
実現する状況

具体例

パターンのもととなった具体的な事象

抽出されたパターン





1. 背景と目的
2. 先進事例調査
 - 2.1 岩手県紫波町
 - 2.2 宮城県女川町
 - 3.3 宮崎県日南市
3. 抽出されたパターンの紹介と考察
4. パターンの展開に向けたワークショップ
5. まとめ

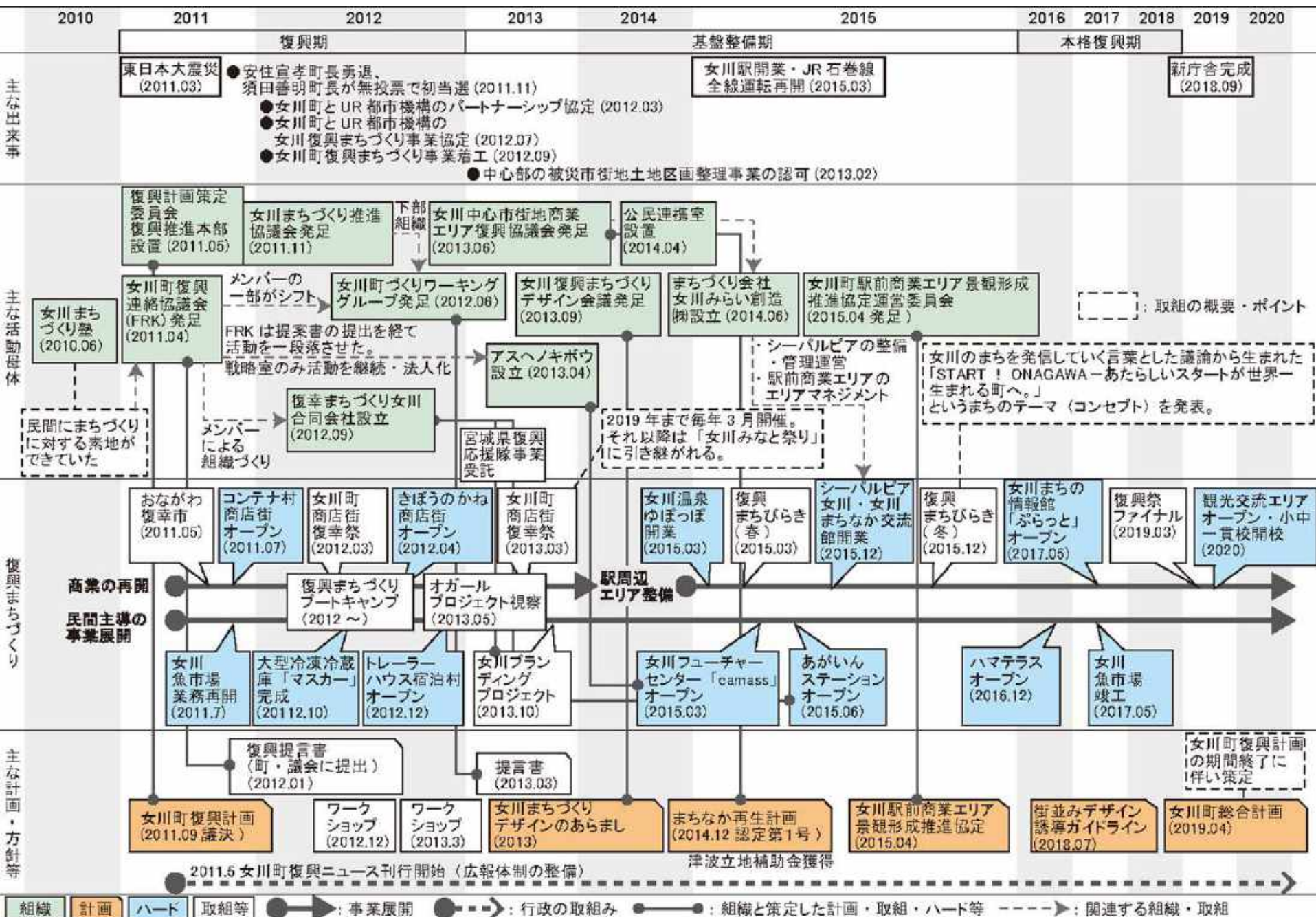
宮城県女川町の概要

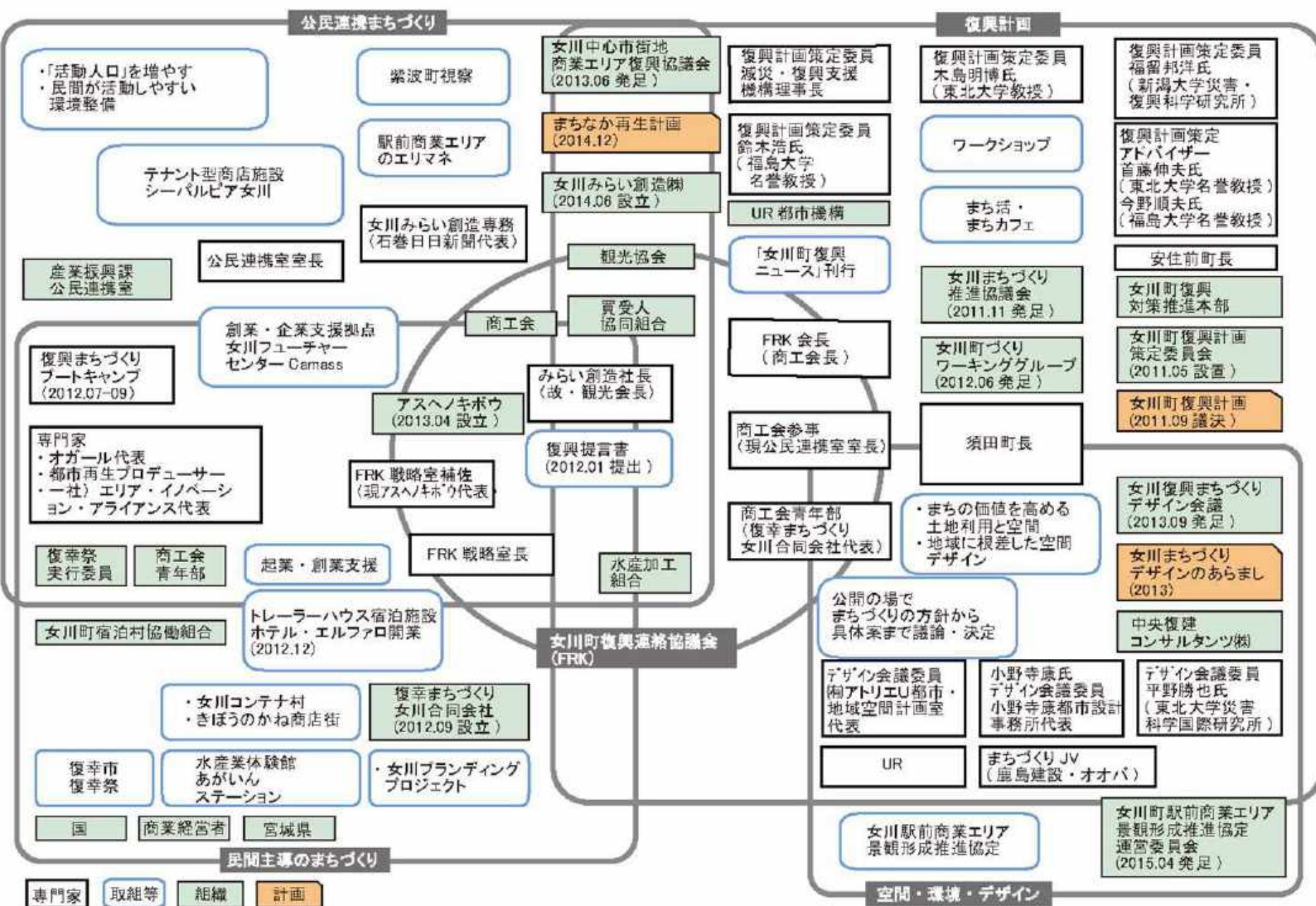


出典) 女川町総合計画, 2019



出典) 女川町総合計画, 2019





宮城県女川町でのインタビュー調査

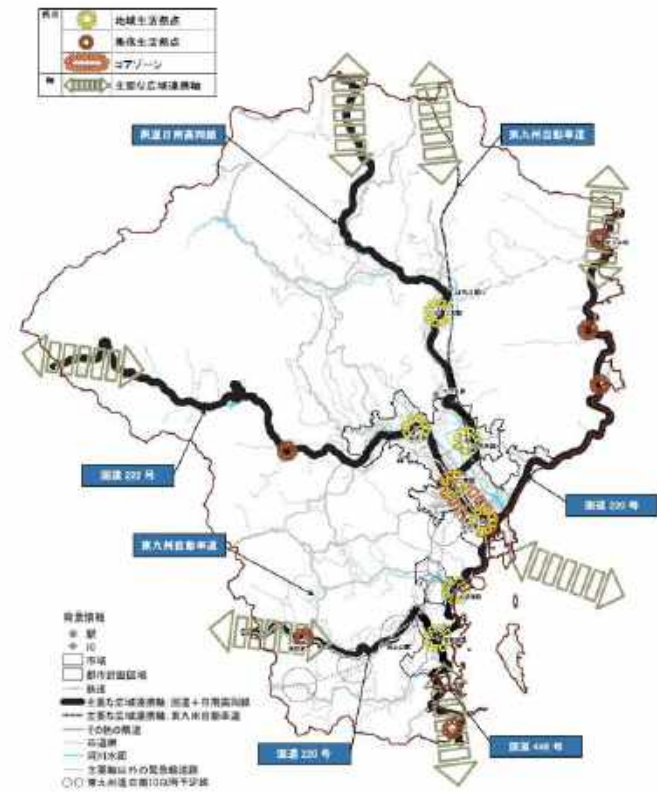
- 女川町総務課公民連携室室長・青山貴博氏，2021年1月29日（金）@女川町役場
- 合意形成プロセスが非常に重要であった。公聴会や住民説明会を計100回程度、行っている。人を集め、今の状況や今後について話しをすることが大切である。
- 地域内だけで話していても限界がある。そこで、外部専門家が必要となる。まちづくりの各段階で、委員会や会議体等をつくり、テーマに合わせた外部専門家を招致し、そこへオーソライズする形で町民を招集する。情報共有・発信・対話というのは、おのずとその場で行われ、リスク回避を図ることに繋がった。
- 行政の関係各部署は、商工会、FRK、女川みらい創造(株)等といった地域の経済団体と対話しているが、主に、町長が窓口になっている。町長が町民と近い存在であることが女川の復興の速さにつながっている。
- ⇒ 対話とネットワーク

宮城県女川町でのインタビュー調査

- 震災直後に、FRKは「住み残る・住み戻る・住み来たる」をテーマに民間の総意となる復興提言書（2012）をとりまとめた。この考えが復興計画に柱として盛り込まれていった。すべてはFRKの提言書からはじまった。
- FRKが提示した「スモールタウン構想」が発端となり、復興の象徴である「レンガ道」が形成されている。ただし、行政が関与し、まちづくりワーキング（2012）で更に洗練され、デザイン会議（2013）でデザインについて検討し、公民連携のもとで推進されることで、イメージを超えた「レンガ道」が発展的に実現した。
- ⇒ 起点となるエネルギー
- 中心街区の整備に際し、紫波のオガールプロジェクトに学び、女川版の公民連携手法を確立した。行政と民間でお互いの希望・要望を合致させ、互いの特性を活用して中心街区を整備した。個別の経済的メリットの計測や事業継承の計画は行政が不得手とするところであり、民間が得意とするところ。民間が得意な所は、極力民間に委ねられた。行政の役割は、関連団体へのサポートであり、法的に困難な部分の解決等を担った。
- ⇒ 地域外の先進事例からの学習と地域外への成果の積極的な発信。

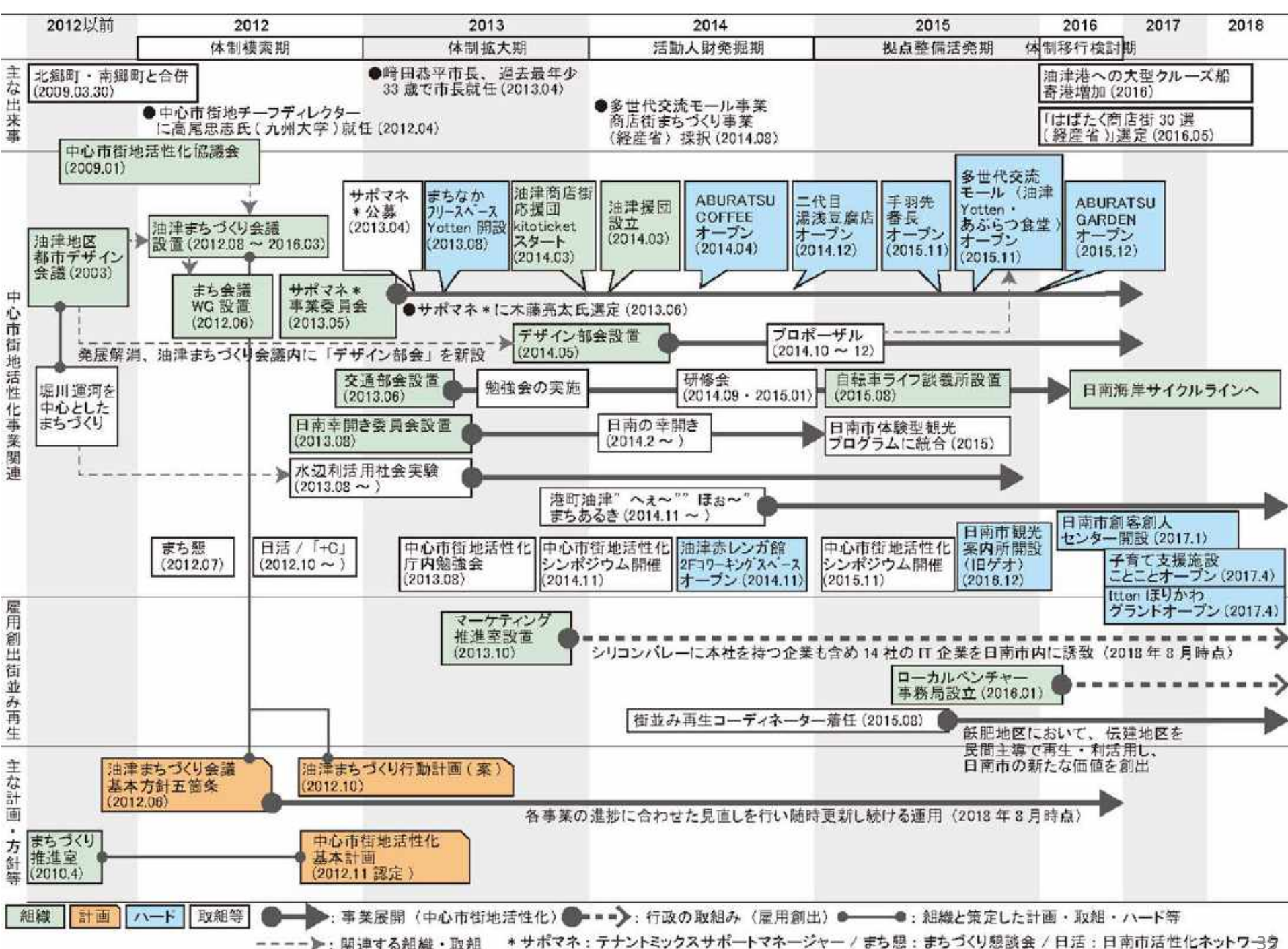
1. 背景と目的
2. 先進事例調査
 - 2.1 岩手県紫波町
 - 2.2 宮城県女川町
 - 3.3 宮崎県日南市
3. 抽出されたパターンの紹介と考察
4. パターンの展開に向けたワークショップ
5. まとめ

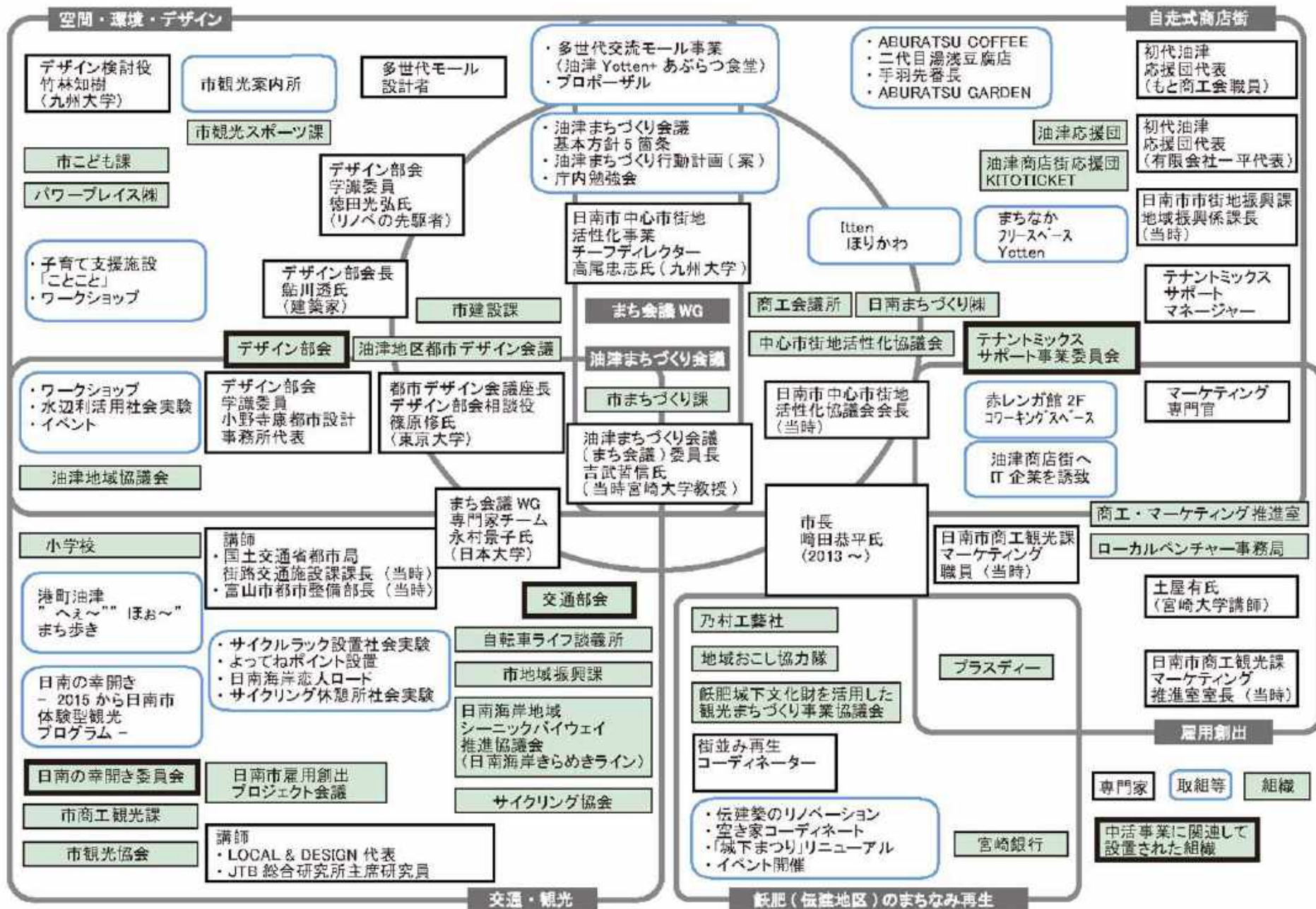
宮崎県日南市の概要



出典) 日南市都市計画マスタープラン







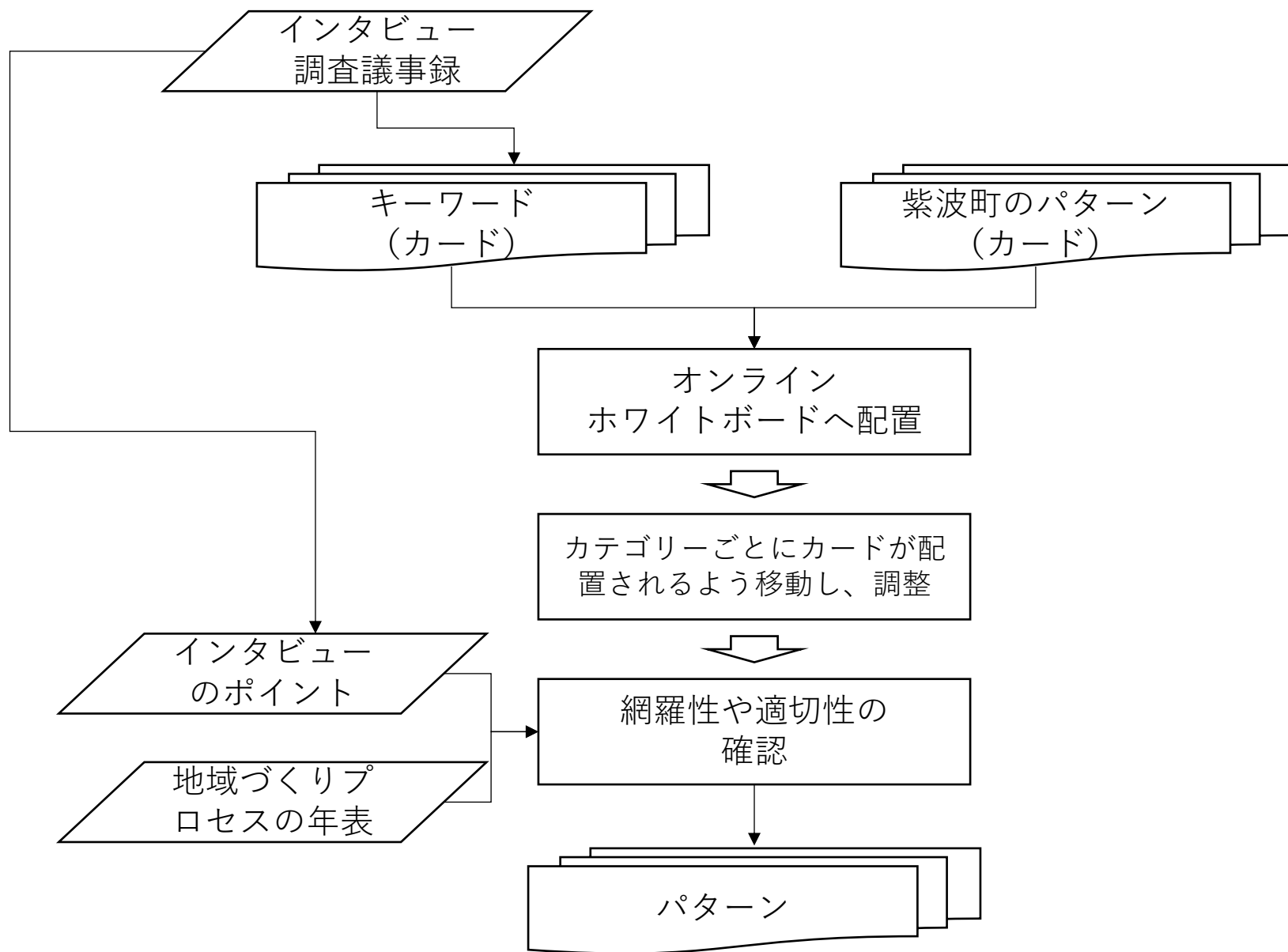
宮崎県日南市でのインタビュー調査

- 日南市・油津応援団（まちづくり会社）設立者・木藤亮太氏，2021年2月17日（水）@オンライン
- 2013年6月に着任して最初の数か月は，地域の人々に話を聞き，色々なヒントを見つけていった。そして，商店街の入口に，多くの人々の記憶に残っている「麦わら帽子」という喫茶店跡があることを知り，最初に，このリノベーションプロジェクトを立ち上げた。「ABURATSU COFFEE」を開業し，自分も一事業主になることで，商店街の人たちと同じ目線に立つことができた。
- 1つできると連鎖反応が起き，隣の呉服屋跡に「湯浅豆腐店」，その隣の空き地に「ABURATSU GARDEN」，その反対側のスーパー跡地に「油津食堂」と「油津Yotten（コミュニティ・スペース）」が生まれた。
- サポマネの役割は契約上は店舗誘致であったが，地元人材の起業を支援していく動きからスタートした。店を持ちたいという人材を拾い上げ，（株）油津応援団で支援しながら，一緒に店を作って運営していく，伴走型の起業家支援を行った。

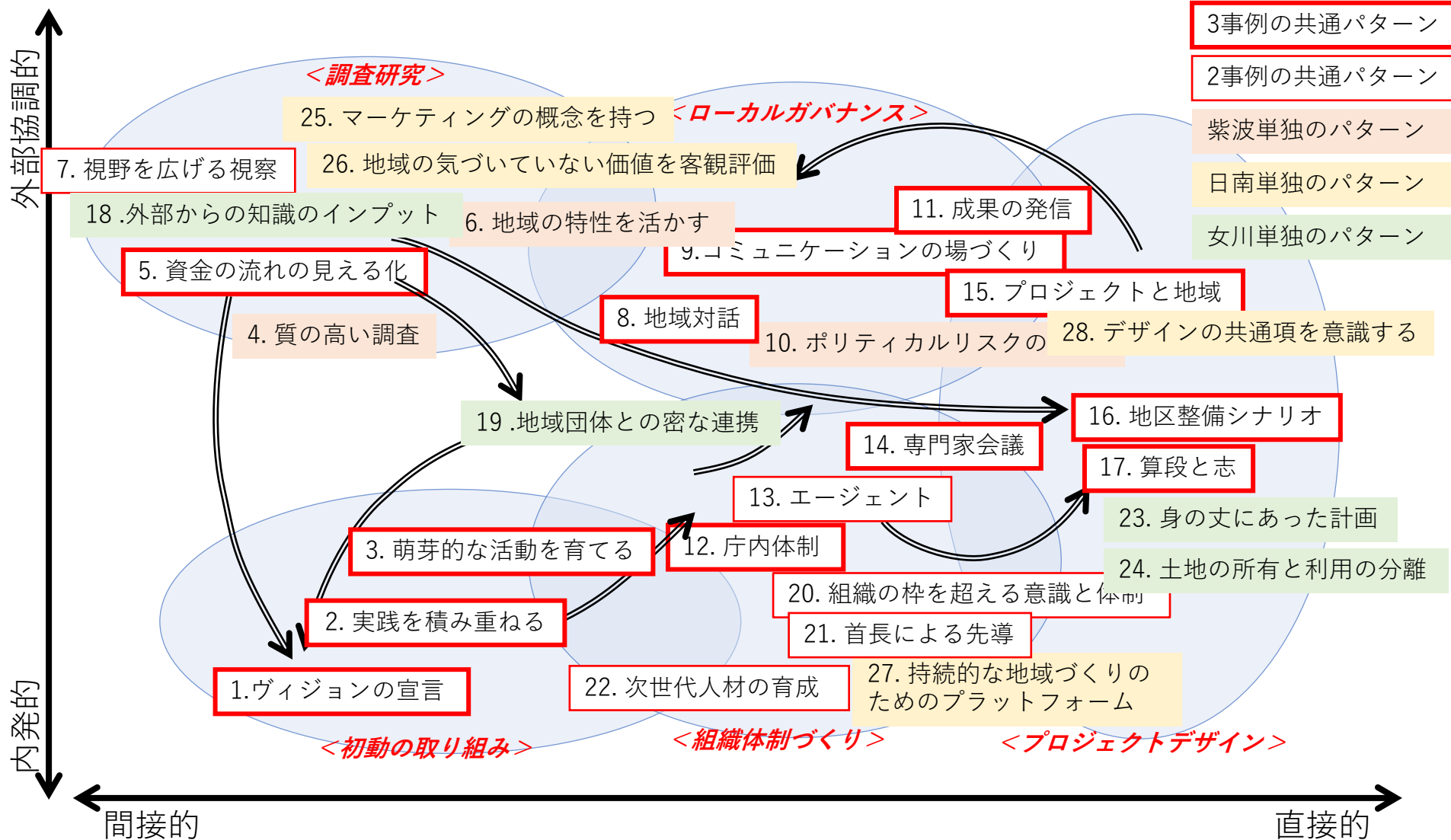
宮崎県日南市でのインタビュー調査

- 市が別途進めていた東京のIT企業のサテライトオフィスを誘致するというプロジェクトとも連動した。視察で商店街に立ち寄った際、若者が中心となって商店街活性化に取り組んでいることに感化され、自分たちもこのまちづくりに参加したいとして、商店街の空き店舗にIT企業のオフィスが入った。その結果、4年で企業誘致まで含めれば29の空き店舗が解消され、その実績は国にも評価された。
- 油津応援団は人が育つためのプラットフォームであると考えている。今いる人材も油津応援団でエネルギーをためて、新しい取り組みを外に出て始めてくれたら良いと思っている。また、そういう空気を知って、新しい人材が入ってくるという循環が起きることを期待している。
- ⇒ サポマネである木藤氏が地域に入り混むことで、さまざまな人的ネットワークを掘り起こしつつ、そこで得られたミクロな情報を活用した
- ⇒ 連鎖的かつ発展的なまちづくりが展開されている。また、その推進プロセスをプラットフォームとして持続可能なように形成しようとしている点が特徴的である。

パターン抽出のプロセス



抽出されたパターン



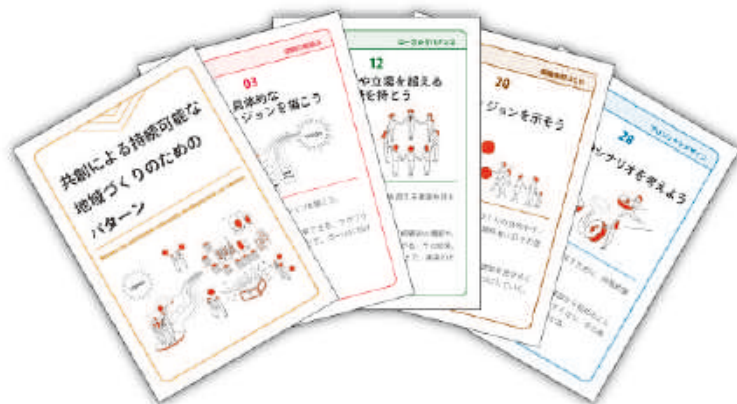
1. 背景と目的
2. 先進事例調査
 - 2.1 岩手県紫波町
 - 2.2 宮城県女川町
 - 3.3 宮崎県日南市
3. 抽出されたパターンの紹介と考察
4. パターンの展開に向けたワークショップ
5. まとめ

成果とりまとめの状況

地域別パターン集として冊子化：



カード化：



今後web化、書籍化等を検討

パターンの具体例

パターン一覧

- | | |
|----------------|--|
| 初動の取組み | 01. 危機感を共有して希望を見出そう
02. 地域づくりの目的や理念を明確にしよう
03. 具体的な将来ビジョンを描こう
04. 小さな成功体験を重ねよう
05. 萌芽的な活動を育てよう |
| 調査研究 | 06. 質の高い調査研究を取り入れよう
07. 先進的な取組みを視察しよう
08. 専門家の知見を得よう
09. 地域の特性を活かそう
10. アップサイクルの考え方を取り入れよう
11. 地域のマーケティング戦略を持とう |
| ローカル
ガバナンス | 12. 組織の枠や立場を超える意識を持とう
13. 地域を巻き込もう
14. 共創につながるコミュニケーションの場をつくろう
15. ポリティカルリスクを回避しよう
16. 新たな参画者と地域をつなごう
17. 次世代人材を育成しよう
18. 子供や若者に地域の良さを伝え関心を引き出そう
19. 物語を発信しよう |
| 組織体制
づくり | 20. 首長のビジョンを示そう
21. 庁内で正しい理解を得よう
22. 目的に合わせて体制を見直そう
23. エージェントを活用しよう
24. 継続的な活動を支える基盤組織をつくろう |
| プロジェクト
デザイン | 25. 身の丈にあった計画を考えよう
26. 志を実現する算段をしよう
27. 地域全体で中核プロジェクトを考えよう
28. 地区整備のシナリオを考えよう
29. 土地の所有と利用を分離しよう
30. デザインの共通項を意識しよう |

04

小さな成功体験を重ねよう



まずは、着手可能な具体的取組みを進めよう。

小さくともひとつずつ実績を重ねて成功体験を得ることで、地域に共感も広がり、主体的・発展的な動きにつながっていく。

04

小さな成功体験を重ねよう

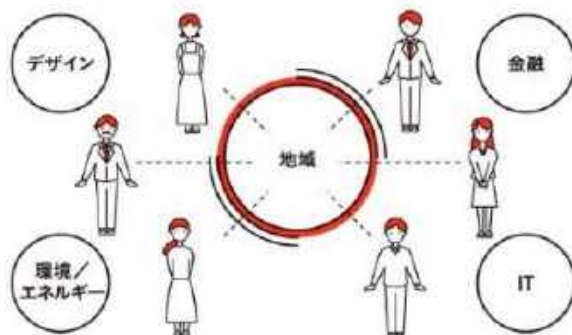
パターンの背景

将来ヴィジョンと現状の間にギャップがあると、何から着手してよいか分からず前に進めない。具体的なイメージや価値観の共有にもつながらず、フォロワー（追随者）も生まれない。

memo

08

専門家の知見を得よう



先進事例に携わった一線級の専門家の知見を得て地域づくりに活かそう。

経験にもとづくノウハウや、俯瞰的視点からのアドバイスは地域からの合意も得やすく、固定概念に変化をもたらす創造的な解決策につながる。

08

専門家の知見を得よう

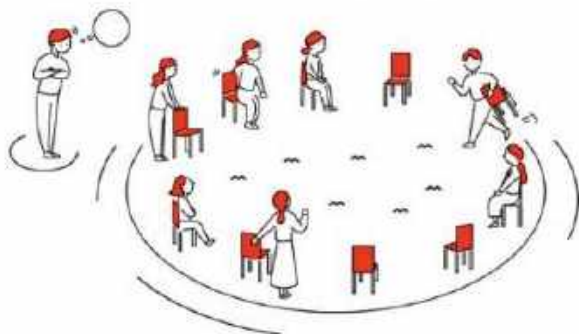
パターンの背景

地域における関係者だけでの議論では、得られるアイデアには限界があり、ブレイクスルーが起こりにくい。また、限られた情報や知識のもとでは、客観的な判断も下せない。

memo

14

共創につながる コミュニケーションの場をつくらう



行政やステークホルダーが対等な関係を構築できる、共創につながるコミュニケーションの場をつくらう。

基礎認識を共有することで効率的な地域づくりが可能となる。

14

共創につながる コミュニケーションの場をつくらう

バターの背景

地域づくりに意欲のある企業や団体等が存在していても、収集できる情報やネットワークに限界があり、発展的・共創的な動きが生まれない。

memo

16

新たな参画者と地域をつなごう

新たな参画者もスムーズに地域に入れるよう、行政などが先導して地域からの信頼をつなごう。

地域と信頼関係がある行政などからの紹介は、新たな参画者と地域の信頼の構築を助ける。

16

新たな参画者と地域をつなごう

パターンの背景

新たなプレイヤーの参画は、地域住民やステークホルダー等に懐疑心を生じさせやすい。地域との信頼関係が構築できなければ、プレイヤーの役割が発揮されず地域に定着しない。

memo

17

次世代人材を育成しよう

パターンの背景

継続的な地域づくりのためには、将来世代の主体的参画が期待されるが、地域のこれからを自分事として捉えられていなかったり、ベテランからの世代交代が進んでいなかったりする。

memo

17

次世代人材を育成しよう

未来の地域づくりに責任を取れる世代が、主体性を持って活躍できる環境をつくりだそう。

ベテランが一步引いて支える立場に回ること、若い世代が前面に出て自分事として取組むことができ、現場力も身につく。

21

庁内で正しい理解を得よう



庁内において丁寧な情報共有を行うことで共通認識を得よう。

新たな取組みに対する職員の正しい理解を促すことで、行政の持つ力を最大限発揮できるようになる。

21

庁内で正しい理解を得よう

パターンの背景

地域づくりのビジョンや取組みが、庁内で正確に理解されておらず、関係部局における横の連携や、地域との一貫した対話が難しい。

memo

23

エージェントを活用しよう



機動力が高く、専門的な知識・経験のあるエージェント等の人材を、事業の推進役として外部から取り入れ活用しよう。

エージェント等が自律的に動くことで、取組みを効率的・持続的に推進できる。

23

エージェントを活用しよう

バターの背景

行政内部で、不得意分野の新しい課題に対応しようとする、時間がかかりすぎたり、職員にストレスがかかり過ぎる等、成果につながりにくい。

memo

27

地域全体で 中核プロジェクトを考えよう



これまでの地域の中心地を重視しよう。

さらに、中核プロジェクトだけではなく、地域全体の方針や各地区の計画と合わせて議論し、地域への波及効果を示すことで多くの市民からの共感が得られる。

27

地域全体で 中核プロジェクトを考えよう

バターンの背景

一部の地区への集中的な投資は、その他の地区における不公平感や疑念を生じさせ、さまざまな軋轢を生み出しかねない。

memo

考察 -地域づくりプロセスの基本構造の特性

- 全体的な構造として、動き出すためのきっかけがあり、そして、最初は調査研究や地域対話がなされつつ、組織体制が整備される。それらに続いて、直接的なプロジェクトのデザインがなされる。
- 間接的なアプローチから徐々に直接的アプローチへと移っていくという構造が共通して見出される。
- 特に建物やインフラの整備に直接関連する要素は「地区整備シナリオ」と「算段と志」等の4パターンのみであり、ほとんどのパターンは「ローカルガバナンス」や「組織体制づくり」など地域づくりの間接的な要素であった。
- 間接的な取り組みが、地域づくりのプロセスの中心的な役割を担っており、間接的な視点の重要性が示唆される。成功事例である3地域の取り組みからは、中長期的な視点からプロジェクトを誘導していくというスタンスが重視されたことが伺える。

考察 -パターン・ランゲージの枠組みの意義

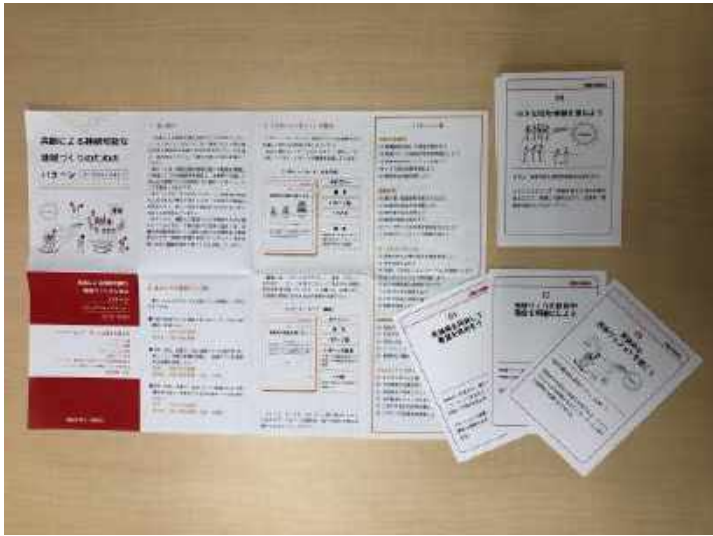
- これまでの、地域づくりプロセスの研究は2つの側面から実施されてきた。1つ目は、主に定性的側面から分析するものである。それぞれの地域実態を十分に考慮した検討はできるものの、知見の一般化や施策への展開には課題があった。一方、定量的側面から、数理モデルを用いた分析では対象を抽象化するため、具体の制度設計やデザインに直接的に活用することは困難であった。
- 本研究で検討したように、パターン・ランゲージを地域づくりプロセスの解析に用いることで、地域づくりプロセスから共通因子を見出したり、地域の固有性を検討するなど、実態情報を施策展開に結びつけるための検討を実施することができる。

考察 -パターン・ランゲージの枠組みの意義

- 本研究で提示したパターンは，それぞれの地域づくりの前線で関わった実践者の視点から記述されている点も特徴的である．既往研究では，客観性を重視することを重要視するあまり，このような実践者の視点を排除，もしくは十分考慮してこなかった部分も多い．
- しかし，地域づくりの現場では，実践者はそれぞれの視点から得られる限られた情報の中で，様々な意思決定をすることが求められている．
- つまり，パターン・ランゲージの枠組みに基づいて記述された情報は，現場の実践で求められている視点とも合致するものであると考えられる．

1. 背景と目的
2. 先進事例調査
 - 2.1 岩手県紫波町
 - 2.2 宮城県女川町
 - 3.3 宮崎県日南市
3. 抽出されたパターンの紹介と考察
4. パターンの展開に向けたワークショップ
5. まとめ

パターンの福島県内の地域への適用に向けたワークショップ

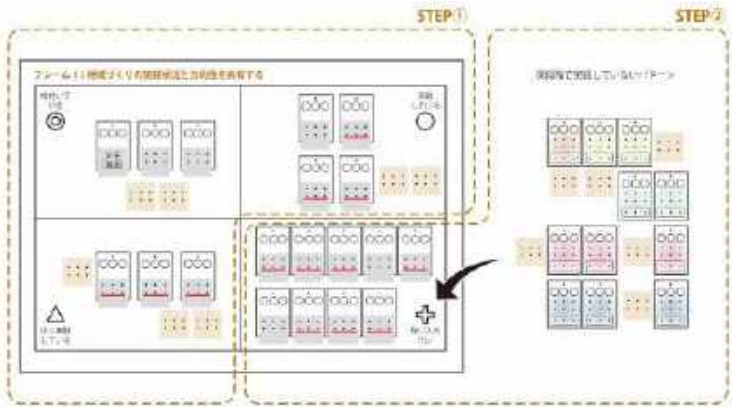


活用シーンのイメージ

- 行政、住民、企業が、地域づくりの取り組みを振り返り、他地域との比較のもとで自地域の特徴を把握するとともに、改善すべき点を検討
- 行政、住民、企業が、共に地域づくりを検討するにあたって、地域の実情を把握し、地域づくりを構想する過程を共有

フレームⅠ.地域づくりの実践状況と方向性を共有する

- STEP① 各パターンの実践度合いと課題の整理共有
- STEP② 地域づくりに取り入れたいパターンを検討
- STEP③ 自地域で実践しているパターンの提案



フレームⅡ.地域づくりの戦略とシナリオを考える

- STEP④ 現在の実践状況を整理
- STEP⑤ 近い将来に取り入れたいパターンを検討
- STEP⑥ 少し先の将来に取り入れたいパターンを検討
- STEP⑦ 地域づくりのシナリオを共有



試行的ワークショップの概要

【日時】 2022年9月8日（木） 14：30～

【場所】 国立環境研究所福島地域共同研究拠点 会議室

【対象地域】 福島県浜通り地域

【参加者】 Aグループ：5名（研究所職員等）＋ファシリテーター、
Bグループ：4名（研究所職員等）＋ファシリテーター

【スケジュール】

14：30～14：40 ワークショップの進め方とツールの紹介（10分）

14：40～15：50 フレームI. 地域づくりの実践状況と方向性を共有する（70分）

～休憩（5分）～

15：55～17：00 フレームII. 地域づくりの戦略とシナリオを考える（65分）

～休憩（5分）～

17：05～17：30 ワークショップの進め方や各ツールの使い勝手についてのフィードバック（25分）

- ・各ツール（パターンカードやフレーム）の使い勝手について、改善すべき点等のご意見
- ・被災地域における適応感についてのご意見

試行的ワークショップの実施



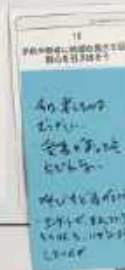
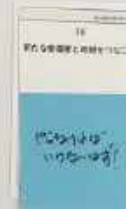
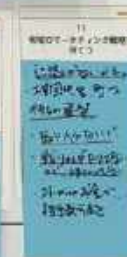
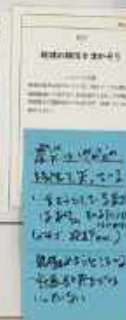
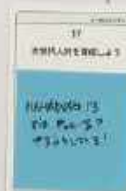
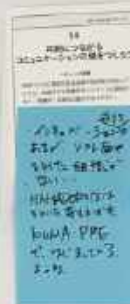
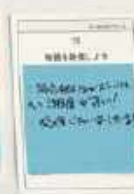
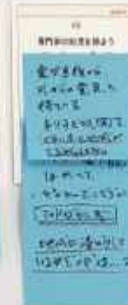
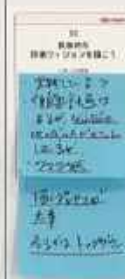
- 開発したワークショップキットの実用性を検証するため、**2022年9月**に国立環境研究所福島地域共同研究拠点の研究所内で、福島県浜通り地域を対象地域とした試行的ワークショップを実施
- **2グループ（各5名）**で合計**3時間**程度で実施し、協力者から、各ツールの使い勝手や被災地域における適応感等についてのフィードバックを得て、改定に向けた課題を整理

フレーム1. 地域づくりの実践状況と方向性を共有する

想付いている



実践している



取り入れたい



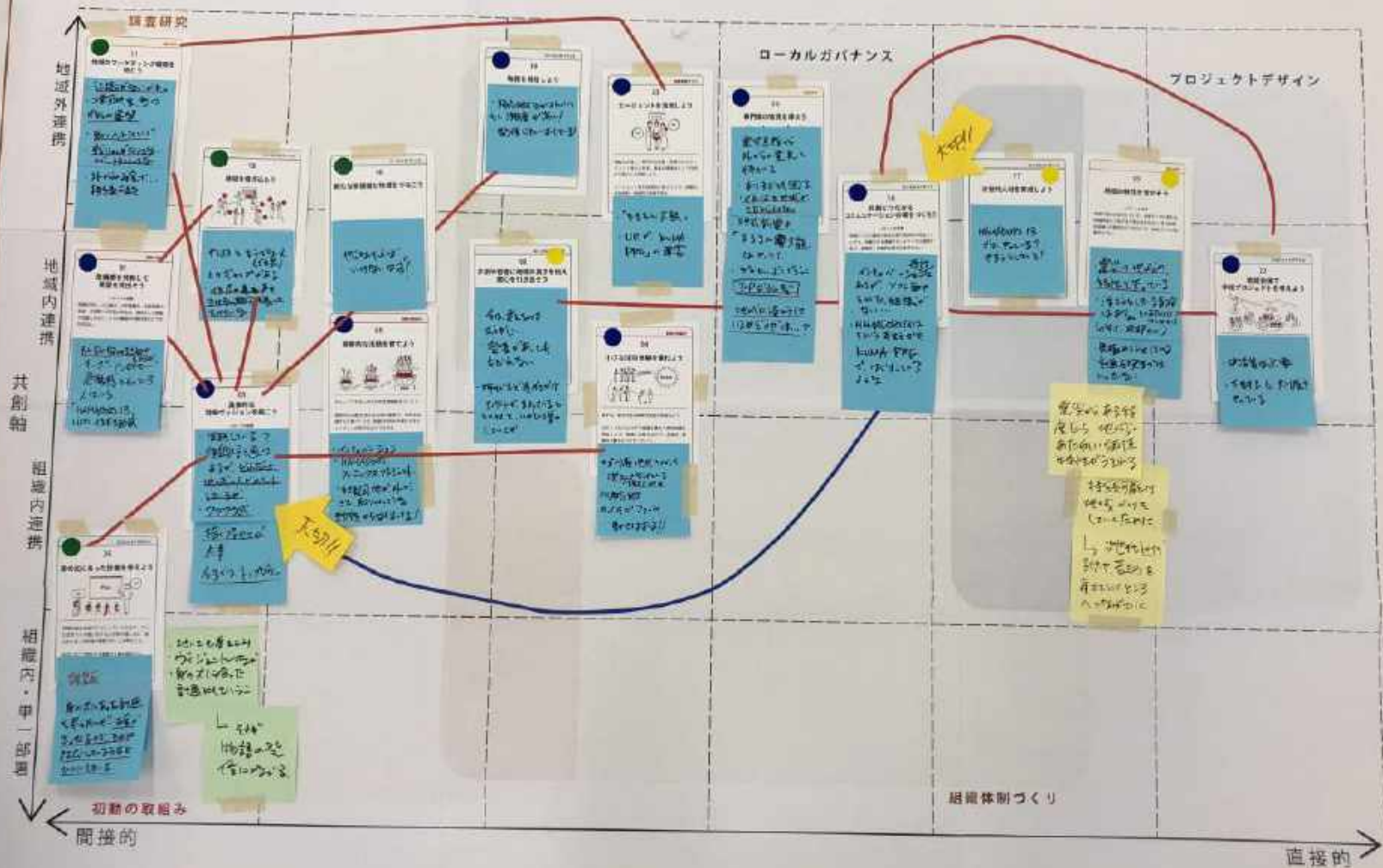
少し
実践している

による特許可能な
地域づくりのためのパターン



Pattern for sustainable community development

フレームII. 地域づくりの戦略とシナリオを考える



共創による持続可能な
地域づくりのためのパターン

Pattern for Sustainable Community Development by Co-creation

フレームII.地域づくりの戦略とシナリオを考える



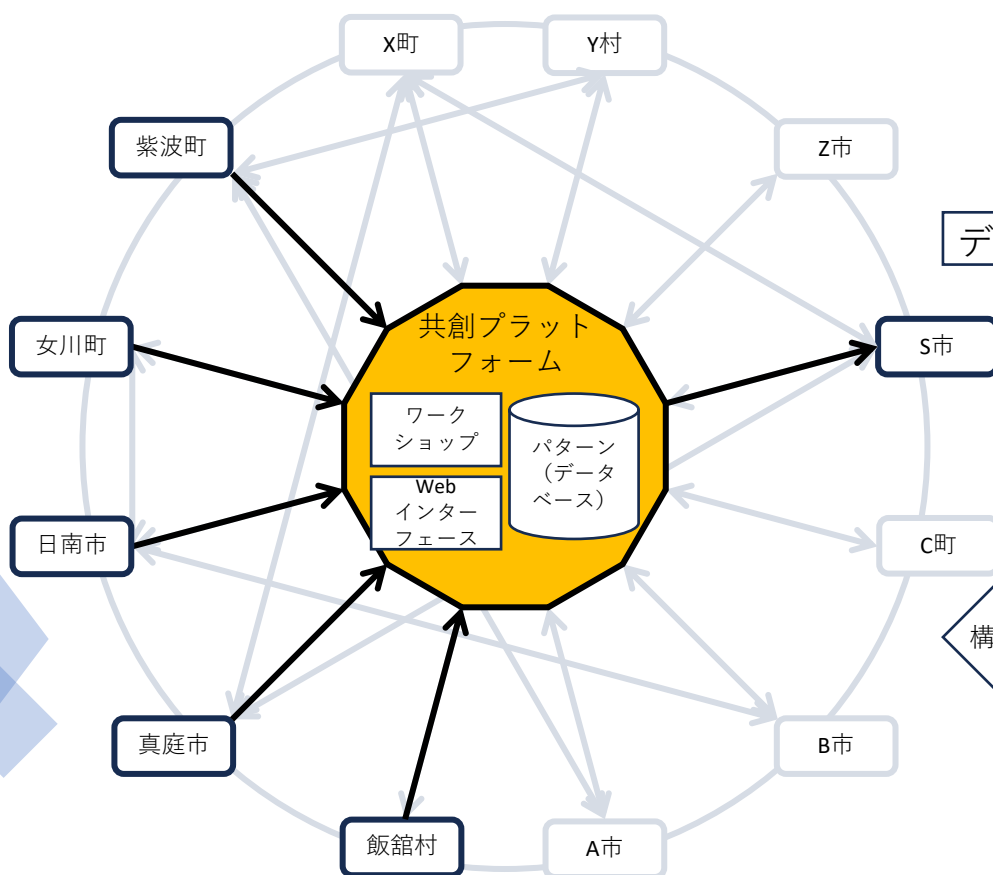
1. 背景と目的
2. 先進事例調査
 - 2.1 岩手県紫波町
 - 2.2 宮城県女川町
 - 3.3 宮崎県日南市
3. 抽出されたパターンの紹介と考察
4. パターンの展開に向けたワークショップ
5. まとめ

まとめ

- 近年デザイン方法論として再評価されている「パターン・ランゲージ」のフレームワークを用いて、環境・まちづくり先進都市の共創的・漸進的プロセスの特徴を抽出しパターンとして記述
- 環境・まちづくり先進都市として、岩手県・紫波町、宮城県・女川町、宮崎県・日南市を選定し、地域づくりプロセスに関する資料文献調査、キーパーソンへのインタビュー調査を実施
- 調査結果より、計**28**のパターンを抽出。その内、**3**事例に共通する中核的な要素として**12**のパターンを抽出。
- 全体的な構造として、動き出すためのきっかけがあり、そして、最初は調査研究やローカルコミュニケーションなどの間接的な取り組みがなされつつ、組織体制や基本計画が整備される。それらに続いて、直接的なプロジェクトのデザインがなされるという構造が共通して見出された。

今後の課題

- 本研究により作成した「パターン」を具体の地域に適用
- 本研究では、先進事例の知見の抽出と展開という方向性のある枠組であったが、地域間の相互学習ネットワークの構築に拡張
- 地域づくりの代替的アプローチ等との比較と検証



地域づくりの代替的アプローチ
・タクティカルアーバニズム
・プレイスメーキング
...

データ

システム理論
・サイバネティクス
・オートポイエーシス
...

構造的理解

第9回創造的復興研究会

「環境・まちづくり先進地域にみられる共創的
プロセスの記述と復興まちづくりへの展開」
へのコメント

(独) 国際協力機構
木全 洋一郎

本発表の意義

- 地域づくりを進めていくうえで重要となる「要素」を実践者の視点から抽出
- その「要素」を「パターン」として他地域への展開に活用

(感想)

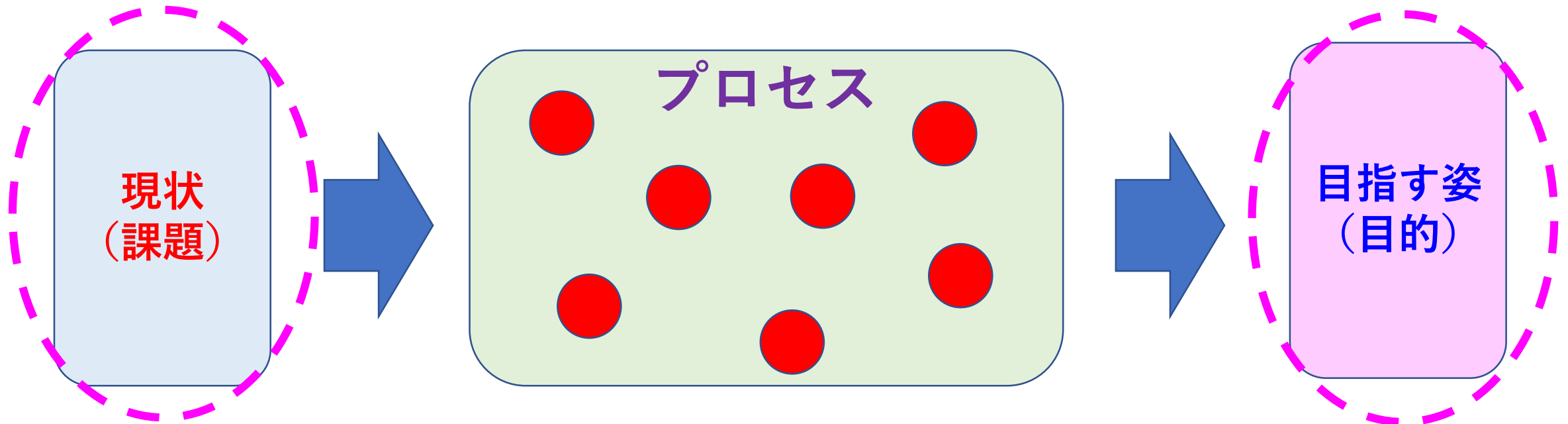
- 本研究では、「地域づくり」を「都市計画（ハード整備）」と捉えているが、「ローカルガバナンス（住民・関係者による活動）」と捉えると、「直接的」と「間接的」は逆転する。
→そこから新たな視点が見えてくるか…

本発表への質問・コメント①

- 本研究で抽出されたのは地域づくりの「プロセス (How)」における要素＝パターン。

→地域づくりを進めるうえでの「現状 (What)」と「目指す姿 (目的 Why)」を分析するためにどこまで使えるか？

cf. PCM 目的分析、SWOT分析



本発表への質問・コメント②

- 本研究で抽出されたのは地域づくりの「要素＝パターン」は目指す姿へ導くための「**変数**」。
→いかに「**変数**」を加減乗除する「**方程式**」を作っていくか？
⇒直接的視点では見えない**ローカルコンテキスト**（歴史、地理的要因、産業等から見えてくる地域の相対的な位置づけや人々の特性）をいかに絡ませていくか？

